

近世中期における「孝子」顕彰の実態とその意義

— 孝子万吉を事例に —

ファン・ステーンパール・ニールス

1. はじめに — 「孝」から「孝子」へ

近世社会を考える上で、「孝」という徳目を見逃すことはできない。「孝」が近世社会において重大な意味を持っていたことは、近世研究史のあらゆる分野でしばしば指摘されており、「孝」自体を対象とする研究も蓄積されている。しかし、それらの研究の多くは「孝」に関わる思想テキストのみの分析から、いわば「観念」としての「孝」を把握するにとどまっている¹⁾。「孝」が近世社会の中で、活きた徳目、活きた思想としていかに形成され、評価されたか、その実態に対する把握はまだ不十分であると言わざるを得ない。その実態を窺い知るためのアプローチとして、本稿では直接「孝」そのものを対象化するのではなく、「孝」を実践する主体である「孝子」に着目したい。

そもそも「孝子」とは何か。字義的・辞書的には「孝行な子」である。一般的な理解も大きくは異ならないであろう。確かにそれが誤りであるとは言えないが、「孝子」と「孝行な子」の間には、用法上の重大な違いが存在することを認めねばならない。というのも、「孝行な子」が人の態度や行動を形容する表現なのに対し、「孝子」というのは、人の存在そのものに対する美称なのである。言い換えれば、人は自らの行動を通じて「孝行な子」たることは可能であるが、他者の評価なくして「孝子」には成り得ないのである。この意味で、「孝子」とは「創作」された存在とも言える。であれば、「孝子」がいつ、誰によって、いかなる過程・方法で、何のために作られたかという、いわば「孝子」創作過程には、近世の人々が、「孝子」という存在に求め、託した思いが反映されているはずである。すなわち、「孝子」創作過程の解明は、「孝子」に対する意識の解明に繋がり、そこから活きた思想としての「孝」を窺い知ることが可能であると考ええる。

本稿は、以上のような視点に基づく、「孝」へのアプローチの試みである。

2. 課題と方法 — 「孝子」創作過程としての「孝子顕彰」

「孝子」創作過程と前述したが、いかなる過程を経て「孝子」は創作されるのであろうか。本稿では、その過程を「孝子顕彰」という語で表したい。ここでいう「孝子顕彰」は、従来の孝子顕彰とは意味合いが異なる。「孝子顕彰」という語は、従来、孝子の業績を称賛し、世に知らしめる行為を指す。しかし、上述のように、「孝子」は実態としての存在であるより、創作される存在である。したがって、顕彰という行為以前においては「孝子」は存在せず、そこ

に在るのは「孝行な子」に過ぎない。顕彰によって初めて、「孝行な子」は「孝子」となるのである。本稿でいう「孝子顕彰」とは、ただ「孝子を顕彰」する付随的な行為ではなく、「孝行な子を顕彰することによって、その人を孝子として認める」、一種の創作行為である。

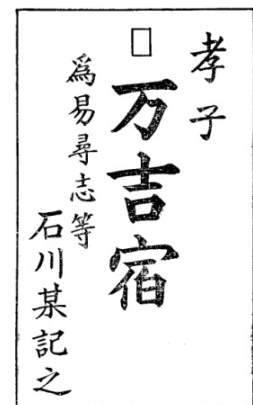
従来、孝子顕彰は「庶民教化」という枠組みの中で理解されてきたが、近年異なる側面からアプローチしている研究が現れている。例えば、勝又基は孝子説話を政治と文学の間にある存在と位置づけ、その文脈から幕藩による顕彰（その場合は、「表彰」と呼ぶことが一般である）を経てからの孝子伝文作成に着目し、「孝子表彰という行為が有した文化的な推進力²⁾」をさまざまな角度から示す一連の研究を行っている³⁾。また、佐野大介は懷徳堂を中心とする孝子顕彰活動を踏まえ、孝子顕彰を「儒者との交流の要点の一つ」や「儒学者間のネットワーク共通の主要な関心事」として位置づけて、交流やネットワーク上における孝子顕彰の機能を指摘した⁴⁾。孝子顕彰の研究対象としての可能性や、「教化」以外の解釈枠組みを提起した両研究の功績は高く評価できる。しかし、孝子顕彰に「文化的な推進力」や「交流の要点」としての機能があったとして、では、そもそもどうして孝子顕彰がそのような機能を果たし得たのか、それを可能たらしめた文脈とは何か、という課題が残されている。孝子顕彰の社会的・文化的な位置づけが必要と考える所以である。本稿では、万吉という有名な一人の孝子をめぐる顕彰活動の実態を紹介・分析することを通じて、近世中期における孝子顕彰の社会・文化的文脈の意味を深めるとともにその文脈を支えた、いわば活きた思想としての「孝」を考える一端ともしたい。

3. 万吉孝行譚の概要 — 「孝子」の発見

孝子万吉の孝行譚は、近代以降多くの修身教科書にも取り上げられた、大いに好まれた題材であった⁵⁾。しかし、現在万吉を知る人はごく少数であろう⁶⁾。

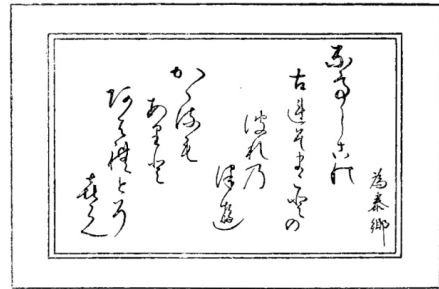
万吉は伊勢国鈴鹿郡坂下宿のあたりの人で、両親と弟との四人家族で貧しい生活を送っていた。家は連日多くの旅人が通る東海道沿いにあり、万吉の父は旅人の荷物を背負い、鈴鹿山を越えることを生業としていた。しかし、父親は安永八年（1779）に倒れ、弟もその翌年に死んだため、万吉はわずか6歳で母と二人だけの生活を余儀なくされた。母親は病氣持ちで働けず、万吉は生前の父と同様、旅人の荷物の運送で僅かながらの生計を立てていた。

彼の状況を大きく変えたのが、石川忠房という旗本との出会いである。忠房は、天明3年（1783）の秋、大坂での大番勤務から江戸へ帰る途中で、偶然万吉と出会った。万吉に興味を持った忠房は万吉の自宅に同行し、その母と話を交わす中で、万吉の苦労とその孝心を知った。感動した忠房は同僚たちとともに金品を集め、万吉に贈った。さらに同年の冬、江戸から大坂へ向かう際にも万吉宅を再訪し、様々な世話をした。大坂に到着した忠房が、万吉のことを様々な人に話したところ、多くの人が万吉の家を訪ねたがった。忠房は訪問者たちの便宜を図り、同僚の三橋成烈に頼んで、【図I】⁷⁾のような標札を万吉宅



【図I】万吉宅の門に掛けられた標札

の門に掛けさせた。さらに、この三橋成烈は天明4年の秋に万吉宅を訪ねた際、紀行文に書きとどめた和歌を京都で師事する冷泉為泰に見せ、評価を求めた。冷泉為泰はそれを見て、傍らに「なでしこの これぞまことの はなのつゆ かゝるもありと あはれとぞきく」という歌を附した。三橋成烈はこの歌に大変喜び、翌天明5年の秋、【図Ⅱ】⁸⁾のように、額の表に和歌を、裏に和歌の由来を記し、万吉の家に送って掛けさせた。



【図Ⅱ】冷泉為泰の和歌が記された額

天明5年7月、石川忠房の妻が病気にかかったことを噂で聞き知った万吉は、連日鈴鹿神社へ参詣してその快復を祈り、無事に忠房の妻は快癒する。

このような万吉の善行は、ついに幕府の耳にも上ることとなり、天明7年3月、万吉とその母は江戸に召しだされ、銀20枚の褒賞を与えられた⁹⁾。

以上が、万吉の孝行譚の概要である。万吉の孝行譚について、初めて出版したのは、京都の石門心学者の植村康済による『勢州鈴鹿孝子万吉伝』（寛政元年（1789）刊）のようである。その本文の最後に「右万吉伝は、京都御在番三橋氏なる御方の筆記置給ひ、あれつれづれに見せ給ひ、且、往来に物し給ひし事共、つぶさに物語し給ひしを、忘れては益なしと記憶し処、かいつまりて置ぬ¹⁰⁾」とあり、これによると、この刊本は「三橋氏なる御方」の「筆記」に基づいて執筆されたという。この「筆記」はおそらく「勢州鈴鹿山麓孝子万吉伝」という記録を指すと考えられる。この記録の写本こそ、万吉に関する顕彰活動の経緯を知るための最適な資料である。

4. 資料の整理 — 「勢州鈴鹿山麓孝子万吉伝」

「勢州鈴鹿山麓孝子万吉伝」（以下、「万吉伝」と呼ぶ）の原本は確認できていないが、その写本は数多く現存している。確認した計13点の写本を【表Ⅰ】にまとめた。「万吉伝」の写本は、写本Kを除くと¹¹⁾、いずれも「孝子万吉伝」（以下、「伝」と呼ぶ）と「孝子万吉伝 附録」（以下、「附録」と呼ぶ）の二つの部分から構成されている。「伝」は、三橋成烈が作成した、万吉の貧困の生活と孝行ぶりを和文で語る伝文である。それに続く「附録」は、石川忠房が執筆したもので、「伝」同様和文で書かれている。その違いは、第一に、「伝」は万吉本人を中心に据えた、その親孝行を物語る伝文なのに対し、「附録」は忠房の立場から見た、万吉と出会ってからの出来事を述べている記録である点。第二に、「伝」においては誤字など些細なもの以外に、写本間の相違が見られないのに対し、「附録」では所収されている情報量において、異同が見られる点である。

以下、「万吉伝」の記述からわかる限りで、本書の成立過程を検討したい。まず、成烈と忠房が二人で「万吉伝」を作成したそもそもの動機は、何であつたのだろうか。「伝」によれば、忠房が、万吉の孝行ぶりを、「世に弘め、人の子たるもの、鑑にもさせまほしく、此事しるし

てよ」と成烈に依頼したのだという。つまり、石川忠房の「教化」への意志に基づいて、「万吉伝」が書かれたとしている。

では「万吉伝」はいつ、どのような経過を辿って成立したのであろうか。「伝」の末尾には「天明五乙巳年冬十月」と記されているが、「附録」には執筆年月日は見当たらない。しかし、それぞれの写本の「附録」の情報は、天明5年の秋の記述まで共通しており、相違が見られるのはそれ以降の情報である。つまり、少なくとも「万吉伝」の成立が天明5年秋以降であることは疑いない。それぞれの「附録」内容にずれが生じてくる最初の情報は、「孝子伝を見はべりて」という小見出しで、万吉のことを称賛する和歌が記されているところである¹²⁾。そこで詠まれている最初の和歌は森山孝盛という旗本のものであり、孝盛の日記によると、彼が忠房の「万吉伝」を筆写し、それに自分が詠んだ和歌を書き加えたのは、天明6年3月24日あたりである¹³⁾。以上から、「万吉伝」の原本が早くても天明5年秋、遅くとも天明6年3月あたりまでに成ったことがわかる。さらに、いずれの写本も共通して天明5年秋の情報のあと、「かゝる深切実孝ハ百行の本なり。親に孝ある程頼母敷事ハあらず。彼がごときをや所謂生知者とせんか¹⁵⁾」と、きれいにまとめるような表現で末尾が飾られている点、この一節をもって「附録」を終りとする写本BとEとLが存在する点、その写本Bにはっきりと「孝子伝終」と記されている点、などから、この時点での「万吉伝」を、忠房は完成品として捉え、世に広めていたことがわかる。この原本が写本として流布していくにつれて、万吉に関する新たな情報がまた「附録」に加筆されるようになったのである。このダイナミックな流通過程も特記に値しよう¹⁶⁾。

以上の執筆経緯には、一つの不自然な点がある。前項で見たように、石川忠房は万吉のことをすでに天明3年で「見出」していたはずである。もし、忠房の執筆動機がただ「万吉伝」にあるような「教化」への意志に基づくもののみであるならば、そこから「万吉伝」の作成までの、少なくとも2年以上の間隔は何を意味するのだろうか。2年後に「万吉伝」執筆に至ったその契機とは何だろうか。それに関する忠房自身による直接的な言及は無い。しかし、万吉をめぐる関係者の活動の実態に目を広げれば、そこには万吉を顕彰する何らかの意図が反映されているはずである。そしてその意図こそが、忠房の「万吉伝」作成の意図とも密接に関わるはずである。次項では、万吉をめぐる顕彰活動を検討したい。

5. 顕彰活動の展開と特質 ― 「文化・文芸」的な営み

天明5年に三橋成烈が冷泉為泰の和歌を額にして万吉宅に掛けさせたと先述したが、その年

【表Ⅰ】「万吉伝」写本一覧¹⁴⁾

	筆写人	成立	形態
A	向榮氏	1846	合冊
B	渡辺孝四郎	1786	一冊本
C	用瀬氏	1867	『孝義状』所収
D	小寺玉晃	不明	合冊
E	不明	不明	一冊本
F	石川勝任	1787 1801 1815	『雑事記』所収
G	駒井乗邨	不明	『鶯宿雑記』所収
H	山田可耕	1916	『講録第四』所収
I	宮崎成身	不明	『視聴草』所収
J	中嶋新九郎	1836	一冊本
K	不明	不明	『落葉集』所収
L	鈴木氏	1787	不明
M	不明	不明	『一話一言』補遺

の秋、忠房の同僚である石野広儔と羽太正養という旗本が大坂から江戸へ下り、万吉宅を訪ねた際、そこで飾ってあった為泰の和歌を見かけ、それを踏まえて自らもまた和歌を詠んだ。「万吉伝」にはその事実しか書かれていないが、寛政6年(1794)に万吉宅に立ち寄った儒者の菅茶山によれば、万吉宅は「皆孝児所致障壁尽貼詩歌。余不能遍読今猶為恨¹⁷⁾」、すなわち壁に読み切れないほど多くの詩歌が貼り尽くされていたと言う。この二つの記述から、おそらく万吉宅に掛けられた為泰の和歌が、それを見る人々に重ねて和歌を詠ませ、さらにその和歌を為泰の額と同じように壁にかけられるようになったのではないかと推察できる。和歌が増えれば増えるほど、訪問者の「創作」意欲をそそり、その中でいつの間にか、壁が詩歌で埋め尽くされるに至ったのであろう。このように、万吉の名

声は、為泰の和歌と密接に関わっていた。天明6年(1786)4月、為泰の子為章が、日光からの帰還の途中に万吉宅に立ち寄ってから、冷泉家と万吉との関連はさらに強まったであろう。

例えば、万吉が天明7年に幕府から褒賞を与えられたという情報を得た儒者の西山拙斎が、それを記念に詩を作り、そこに「万吉名声已赫然、縉紳歌頌久相伝¹⁸⁾」、つまり褒賞以前から、万吉はすでに広く知られ、身分の高いものたちは万吉のことを久しく歌の形で語り続けてきたと記している。このことも、おそらく為泰の和歌の存在が背景にあると考えられる。また「附録」も、「孝子万吉此度公褒に預るも、いにしへ冷泉民部卿殿御歌給わりけるより其名聞へあげらるるとなむ」と、万吉が幕府に表彰されたことは、冷泉為泰の和歌がその名を世に知らせた結果だとしている。その真偽はともかく、少なくともこれらの記録の筆者たちが、冷泉為泰の和歌の影響力を強く認識していたことを物語るであろう。為泰の和歌がこのような影響力を持ちえたのは、その影響を受けるに足る、文化的教養のある人々がいたからである。実際、万吉を顕彰する人々の中にはそのような人物が多数存在した。

例えば、天明7年3月4日に、万吉が幕府の褒賞を受けるため江戸にやってきた際、大田南畝は、彼をその宿泊先で訪ねてみたが、残念なことに留守であったと述べている¹⁹⁾。確かに、万吉は江戸滞在中、宴会などで多忙な日々を送っていたようである。「附録」によると、江戸にて万吉は、忠房の家を昼から暮れまで訪問しており、また成烈の家をも訪ねた。成烈は万吉の来訪に合わせて、親戚・友達を誘い、三十人以上がその場に参加したという。その顔触れの詳細は不明であるが、一部は、その場で詠まれたと思われる和歌の下に記されている「字」をもとに、推測が可能である(【表Ⅱ】)²⁰⁾。旗本、特に五番方に務めているものが多いことがわかる。さらに、写本Fによると、池田文明という旗本も、幕府表彰当日、万吉を婿の本質保有宅

【表Ⅱ】 成烈宅宴会で和歌を詠んだ人々

字	人物	当時の身分・役職。
貞臣	横瀬貞臣	旗本。高家。近世武家三歌人の一人
貞樹	横瀬貞樹	旗本。高家。横瀬貞臣の子
至豊	山内至豊	旗本。鉄砲筆筒奉行
在屋	酒井在屋	旗本。小性組
次賢	高木次賢	旗本。小性組
孝由	佐久間孝由	旗本。既に書院番を引退
成烈	三橋成烈	旗本。大番
実房	沢実房	旗本。小十人組頭
頼昭	佐久間頼昭	旗本。佐久間孝由の子。天明八年、書院番に就
政香	酒井政香	旗本。酒井在屋の子。寛政元年、小姓組に就
成方	三橋成方	旗本。三橋成烈の子。寛政三年、大番に就
長桓	大塚長垣	旗本。目付

に招いて祝ったという。そして、万吉は江戸のみならず、その翌年に大坂でも宴会に招かれた。寛政元年の夏、万吉は大坂に行き、そこで儒者の若槻幾斎によって懷徳堂に連れられ、学主の中井竹山と対面したのである。万吉が大坂にいるという情報は、大坂城代の堀田正順の耳にも上り、正順は万吉をその別邸に招待してもてなしたという²¹⁾。

このように、江戸・大坂で多くの文化的教養のある人物が万吉に強い関心を持ったが、しかし、万吉ゆかりの地と言え、何より自宅のある鈴鹿坂下であり、実際数多くの人物がこの地を訪ねている。たとえば、写本Cによると、天明7年の夏、水戸藩主徳川治保は京都へ上る途中、坂下宿で休憩を取った際に、万吉を本陣に召出して、銀十枚を与えた上、帰り道でも再び召出して、さらに銀十枚を与えたという。同じく写本Cには、天明7年冬には、高家旗本横瀬貞臣も、京都に上る途上、万吉を訪ねたとある。中井竹山の「紀孝子万吉事」によると、天明8年夏に、老中の松平定信は万吉を閑宿に召出して対面したとある²²⁾。亀井昭陽の「記孝子万吉事」には、寛政5年に、福岡藩主黒田斉隆が訪ねたことが記録されている²³⁾。また、石見浜田藩主松平康定は、『伊勢麻字手能日記』で、寛政7年8月、伊勢詣の途中で万吉宅を訪問したことを記している²⁴⁾。

万吉を訪ねた、以上のような社会的地位と文化的教養の高い、文人・旗本・大名・儒者たちが、万吉に何を求めたのか。万吉のどこに魅かれたのか。そういった感想を直接に述べる資料は見当たらない。しかし、万吉宅の壁に読み切れないほどの「詩歌」が貼られた、という前述の菅茶山による観察から、ある程度推察できる。「漢詩」と「和歌」を作るために、ある程度の教養が必要であることは当然であるが、それらの詩歌を読解するためにも同程度の教養が求められる。万吉の読解能力は知りたいが、平仮名での和歌はまだしも、漢文で書かれた漢詩を彼が理解することは極めて困難であったはずである。つまり、これらの詩歌は、万吉ではない読者が想定されていたと考えられる。その読者とは、他の訪問者であろう。つまり、文化的教養のある訪問者が、他の文化的教養のある訪問者に向けて作成した詩歌と理解すべきであろう。ここで、万吉宅の壁は、言わば「掲示板」のような役割を果たしている。それぞれの訪問者は「個人」でありながらも、万吉の壁に貼ってある詩歌を通じて、他の訪問者の存在とその感想を共有できる。さらに加えて、自らが詩歌を作成して貼ることによって、その共有された文化的「場」にも参加できたのである。

万吉宅の壁がそのような機能を有するに至った契機は何か。それは為泰の和歌の額であろう。当時、藤原定家を先祖に冷泉家の歌壇における権威は特別に大きく、冷泉家は、言わば「雅」の世界を代表する家であった。「雅」を象徴する冷泉為泰の和歌が、「俗」の典型である万吉宅を飾るのは、「雅中の俗」を大変好んだ当時18世紀の人々の美学観をくすぐった光景であったはずである²⁵⁾。その光景が訪問者を引き、さらに詩歌を作成させる。その繰り返しによって、万吉宅は、訪問する高名な人物とその詩歌が持つ文化的権威を吸収した、いわば一種の「名所」となっていくのである。

このように、為泰の和歌の額が万吉宅に掛けられたことは、万吉の名声を高め広める上で重要な意味を持つ出来事であったと考えられる。「万吉伝」も例外ではなく、事実、先述したように、その額が送呈された後、時間を経ずに「万吉伝」が作成され、完成後初めての加筆は、為泰の和歌を踏まえて詠まれた「孝子伝を見はべりて」という小見出しでの和歌があった。「万吉伝」

が完成され、流布され始めたその時期に、為泰の和歌が重要な意味を持っていたのである。為泰の和歌に影響を受けた人が多く確認できるが、「万吉伝」成立過程を考えると、忠房もまぎれもなくその中の一人であった。忠房の執筆の動機がここにあったと考えるのが自然である。次項で詳しく検討する。

6. 忠房の「孝子」顕彰活動の実態と広がり — 「孝子」顕彰プロセスの意義

実は忠房が顕彰した「孝子」は、万吉だけではない。彼はまた、駿府の孝女まきと孝子多十郎の顕彰活動とも関わっていたのである。『二孝子記事』（寛政3年刊）に所収されている、野沢昌樹の「駿府伝馬町孝女満幾記事」の附録によると、天明7年7月に「石川忠房のうし、羽太正養のうしたち、二条のまもりにのぼり給ふけるが、駿府の駅にやどり給ひぬ、（略）僕はからず二人の大人にたいめんし、物かたらひけるに、孝女まきが事におよびぬれば、二君子その孝心を感じ、さらに同じ志のうしたちにかたり、ともに物などめぐみ、且かのむぐらが宿にも立よ」ったという²⁶⁾。すなわち、忠房は駿府に宿泊した際、野沢昌樹と「はからず」も出会い、初対面でありながら、孝子に関する会話をしているのである。このこと自体が、彼らの関心を示すものとして特筆に値しよう。さらに、同じく野沢昌樹の著作である『孝子多十郎行状記事』（寛政6年刊）²⁷⁾の附録には、寛政2年8月に「石川忠房大人、（略）此記事のことに及べば、取て見給ひ、孝心を感じ、則よびて物給はりければ、彼したしき大人たち、或は二条、或は浪華の往復にたづね呼給ひ、いさゝかのめぐみ数多ありける（略）又次のとしも、かの大人の物語きゝしとて、十数人追々に旅館へめして、ことの葉の恵み、或はこがね白銀など給ふ」とある。「したしき大人」たちは「或は二条、或は浪華」を往復することから考えて、ここでの「したしき大人」は、忠房と同じく大番を務める旗本たちを指すとみて大きくは誤らないだろう。孝女まきに関する文章に出てくる「同志」もまた具体的にはこの旗本たちを指すのであろう。旗本からなる「同志」グループが、この時期に孝子顕彰活動を行っていることがわかる。つまり、忠房はその活動の中心人物であり、そして同時に顕彰を積極的に発展させる仲間もいたのである。例えばそれは、先述した羽太正養である。正養の手による「孝子糸太郎略記」という写本がある。その寛政2年9月の序によると、「鈴鹿の孝子万吉、駿府の孝婦まき（略）かれらにも亜（つ）ぐべき一人の孝子あり（略）かの東路の二孝子に劣らぬものなれば、いでや同志の人々に告て、めぐみあらせんとおもふに、口づから言んも長々しければ、いさゝか見きく所のかたはしをしるして、物語にかへんと²⁸⁾」したという。万吉やまきを引き合いに出して、糸太郎がそれに「亜（つ）ぐ」や「劣らぬ」孝子だと強調するここでの記述は、明らかに、正養は、この「略記」の読者、すなわち本文にいう「同志」が万吉とまきの事例を知っていることを想定している。したがって、ここでの「同志」も、他の事例で顕彰に尽力した旗本の「同志」グループを指すことになる。

このように、顕彰活動に携わる「同志」グループの存在が確認できるが、そもそもなぜ顕彰活動に、「同志」が必要だったのであろうか。正養によると、それは「めぐみあらせん」がためである。つまり、糸太郎という「孝子」の存在を「同志」に伝えることで、彼らが糸太郎を支援することを期待していたのである。実は、「万吉伝」の「附録」でも同様の記述がある。

忠房も「志有人ひと尋問あるべし也。かくありてぞ貧きなかの助ともなるべし」と「同志」に「助」を勧めているのである。このような支援への期待は忠房の万吉顕彰にも共通するものであった。彼らの顕彰活動には、「同志」を募って、基金を集める、一種の救済活動の面があったわけである。事実、忠房はその後、目付、勘定奉行、道中奉行という要職を歴任し、庶民にきめ細やかに心を配り、庶民から最も慕われた幕臣の一人となった²⁹⁾。経済的な救済活動をも視野に入れた彼の顕彰は、そのような幕臣としての彼の役割とも関わっていることであろう。しかし、ただ救済することが目的であれば、万吉を「孝子」として顕彰する必要はない。あえて「孝子」として「顕彰」する形を取るには、貧困にあえぐ孝行な子を支援するという形だけでは足りない、何らかの積極的な意味があったはずである。また、その「顕彰」が、公の幕臣でありながら、あくまでも私的に行われたものであることも重要である。先述したように、忠房が万吉を「発見」してから、幕府に表彰されるまで4年もかかっており、その間に積極的な働きかけを行った形跡も見当たらない。糸太郎に関しても、本文に「はからざるに庁所に召され、糸太郎が孝、忝くも公間に達し、白銀五枚を下したまはる」とあるように、正養自身が直接報告したのではなく、正養の意図の外で表彰が行われた。つまり、忠房らが目指した活動は、「公」の正式承認を必ずしも必要としていなかったのである。「公」を代表する立場にある旗本たちが、「公」的ルートでの顕彰ではなく、あえて「私」的な顕彰を目指したことにも意味があったはずである。要は、忠房にとって、あくまで彼自身が、万吉を「孝子」として顕彰する、換言すれば孝子を彼自身の手によって創作するという行為そのものが重要であったと考えられる。翻ってみれば、「万吉伝」中、「伝」は万吉の行状を述べたものであり、万吉に視点を据えた物語であった。しかし、「附録」という形で、万吉を顕彰する人々の動き、すなわち孝子創作過程の記録をも忠房は残していたのである。「万吉伝」に「附録」が存在すること自体が、そもそも忠房が、ただ万吉を紹介するだけでなく、万吉を「孝子」として創作することを重視したことを示す傍証にもなろう。このようなスタンスで、忠房は孝子顕彰に積極的に関わっていたのである。

7. 「万吉伝」の読者 ― 繋がり合う「同志」

忠房が、「万吉伝」を誰のために作成したかを探るには、「万吉伝」という書物がいかに活用されたかを検討する必要がある。

例えば、上野興龍の「孝子仁右衛門行状略記」（寛政2年刊）³⁰⁾の天明7年8月の野沢昌樹の序によると、「京より忠房の大人ミつからしるし給ふ鈴鹿孝子の伝又難波孝子のも出写して贈り給ひぬされハあたりの孝子のも記事物して贈りてよと有るれハ孝女ハ僕さきに記せしをとく贈りぬ」とある。すなわち、忠房は野沢昌樹に万吉の伝（「万吉伝」であろう）と大坂のあゝ孝子の伝（詳細不明）を与え、引き換えに野沢昌樹から孝女まきの伝文をもらった。これは、孝子に関心を持つ「同志」間における孝子伝文の交換である。この事例は、「万吉伝」ができてから2年も経っているが、最も早い事例もある。

森山孝盛が「万吉伝」を筆写したと既述したが、実はそれは忠房に依頼されたからであった。「森山孝盛日記」は、「岩次郎（＝忠房。筆写注）右万吉家江被残置候³¹⁾」と記しており、忠房が、

森山孝盛による写本を万吉に贈ったことがわかる。しかし、万吉は「詩歌」同様に、「万吉伝」も十分には読めなかったはずである。つまり、忠房が「万吉伝」を万吉宅に残す上で、想定していた読者は、万吉本人ではなく、万吉宅を訪問したいいわゆる「同志」たちであったと考えられる。すなわち、「万吉伝」は「同志」のために利用されたのみならず、もとより「同志」のために作成された可能性が高いのである。

そうすると、「万吉伝」に主張されている「教化」という作成意図に対して疑問が生じてくる。「万吉伝」に、「人の子たるもの、鑑にもさせまほし」とか述べているが、以上の検討から、「万吉伝」の執筆をそれだけで位置づけることはできない。そもそも「万吉伝」は「人の子」のためではなく、顕彰にともに関わる「同志」のために作成されたとしか考えられないような流通・利用の実態を見せている。さらに、その目的が「鑑」を示すことにあったならば、万吉との出会いから「万吉伝」の作成までの2年間の間隔が説明できない。ただ万吉の孝行譚を広めたいのであれば、2年前の時点でより積極的な活動ができたはずである。それをしなかったことが、忠房にとって、万吉の孝行の存在だけが「万吉伝」を作成する動機ではなかったことを意味しよう。

8. 孝子顕彰の社会・文化的文脈 ― 自己表現としての孝子

以上、忠房の孝子顕彰と「万吉伝」を三つの観点から分析してきた。そこから、三つの重大な要素が明らかになった。第一に、「文化・文芸」。第二に、「孝子」顕彰プロセスの重視。第三に、「同志」。つまり、忠房の孝子顕彰の文脈を説明するには、この三つの要素を含まねばならない。その文脈として、文芸的な共同体に着目したい。近世においては、「連」「座」「社」「舎」などのような共同体に「同志」が集い、文芸を営む「場」が多く存在した。近年、池上英子はそういう「場」の特徴として、「つどいの場と文芸・芸能を楽しむふれ合いの「プロセス」自体の重要性とが、一種独特の美学として結晶化する方向に展開したことと、それが既存の社会的結びつき、共同体の団結のために行われるだけでなく、新しい人びとの出会いをつくる場として重要な意味をもってきたこと」を指摘した³²⁾。孝子顕彰は、こういう文芸的あるいは文人的共同体と同じ形態を取っているのではないか。この点についてさらに詳しく論じる。

忠房は有能な行政者、しかも庶民にも慕われた存在となったことから、彼の領民を支配する主体としての意識と、世間の事情に関する「個人」としての責任感も強かったと推測できる。したがって、万吉などの困難を憐れんで、それをどうにか助けたいという気持ちが常にあったはずである。しかも、その気持ちは忠房だけではなく、同僚をはじめとした、周囲の「同志」にも共通しており、お互いに確かめ合いながら強化されていった。そして、彼らは幕臣としての立場から、ただの「事例」として万吉やまきを報告することだけで飽き足らず、その「志」を文芸的な形で表現することを求めたと考えられる。彼らは文雅に通じた教養の高い旗本グループであり、自分の志を表す自己表現として、文芸的な形を取ることは必然であった。彼らがあえて「孝子顕彰」という形にこだわったのは、孝子顕彰がそのような彼らの意欲に応え得る行為であったからと考えられる。すなわち、孝子顕彰そのものが自分の志を表現する「場」であり、さらに、文芸的な表現様式を通じて、「同志」たちと共有し得る、彼ら自身にとって

の意義を持っていたのである。だからこそ、忠房らは、万吉をただ貧困にある「孝行な子」として「公」的な手段を通じて支援するのではなく、「孝子」として「私」的に顕彰したと考えられる。その顕彰過程は、冒頭に述べたように、「孝子」をいわば「創作」する過程でもあり、そこには顕彰する者の「美」的感覚が大いに反映されるプロセスでもあった。その「美」を理解し、さらに自らもそのプロセスに参加するためには、基礎的な文化的教養は無論のこと、顕彰事例の持つ文脈に関する背景的知識が必須である。

当初、万吉宅を訪ねる人々は、同僚なる「同志」を中心とした忠房の個人的な関係者達であった。つまり、彼らは忠房を通じて、直接的に情報を得ることができる人々であったのである。しかし、額が掛けられて以降、万吉の名声は忠房の手を離れ、冷泉為泰の文化的権威とネットワークを媒介として、強い発信力を以て広まっていた。必然的に、その後新たに万吉宅を訪問する人々は、忠房の個人的な人間関係を越えた「同志」へと変化するものであり、彼らに忠房が持つ詳細な情報を伝えるためには、口頭ではない、また別なメディアが必要となったのである。その新しい「同志」が顕彰の文脈を正しく把握し、さらに顕彰できるように、忠房は「万吉伝」を作成し、万吉宅に設置したと考えられる。そしてそれは、「万吉伝」というテキストを通じてではあるが、忠房と新しい「同志」との出会いでもあった。

孝子顕彰のネットワークに関して、佐野大介は孝子顕彰が「儒者との交流の要点の一つ」となった点を指摘したが、本稿の検討からもわかるように、そのようなネットワークは儒者に限定されたものではなく、儒者・文人・公家も関わりながら、幕臣によっても形成された。したがって、孝子顕彰に関しては、「儒者の交流ネットワーク」や「幕臣の交流ネットワーク」といった身分的な枠組みを超えた「同志のネットワーク」として位置づけるべきであろう。そして、そういったネットワークの成立を可能とした一つの重大な要素は、孝子顕彰というプロセス自体が持った、文化・文芸的活動としての意義であったのである。

このように、万吉をめぐる孝子顕彰に、人々の「志」を文芸的に表現できる「場」としての機能があったことを明らかにしたが、本稿をもって孝子顕彰という現象全体を究明したとはいえない。さらに事例研究を重ねた検討も求められるが、今後の課題として、孝子顕彰に現れる「志」とは何か、またそれがいつ、いかなる過程を経て形成してきたか、そして「仁政」や「教化」といった政治的観念といかに関わっているのか、という思想レベルでの検討を試みたい³³⁾。思うに、その「志」は、「孝子」創作のみならず、自己のアイデンティティ創作・演出とも深く関係しているはずである。

9. むすびにかえて ― 観念としての「孝」から活きた「孝」へ

万吉という「孝子」をめぐる顕彰活動を見てきたが、その顕彰活動は意外なほどに彼の「孝」の内容には着目しない。このことは、顕彰するかどうか「孝行」の程度の問題ではないことを意味している。「孝行」という行為をいくら積んでも、「孝子」と顕彰されるとは限らない。顕彰の目的が、「美」的感性に基づく「創作」にあるとすれば、顕彰されるか否かの基準は、「美」の程度に求められることになる。しかし「美」というものは、あくまでもそれぞれの感受性の問題である。つまり、「孝子」の基準とは、「孝」という行為自体ではなく、他者がその「孝」

をどう感じたかどうか、心が動かされたかどうかこそが意味を持つことになる。感動を通じて認識する「孝」は、思想する「孝」ではなく、実践する「孝」でもない。それは、体験する「孝」である。抽象的観念である「孝」は、感情と密接に関わることで、人々の文芸的な自己表現を呼び起こし、具体化された。その意味で活きた「孝」であったわけである。従来の思想研究は、「孝」を道徳的な「観念」として捉えて分析してきた。しかし、私は、このような、「美」的な「体験」と「表現」として活きた「孝」にもっと注目すべきだと考える。

注

- 1) もとより枚挙に暇ないほどであるが、1950年代以降に発表された大部分を網羅・整理したものとして、佐野大介・前川正名『『孝経』及び「孝」関係論考目録』（『中国研究集刊』第24号、1999）がある。
- 2) 勝又基「日本近世における孝子表彰の発生—孝子説話研究のため—」（『東アジア比較文化研究』第8号、2009）85頁。傍点は筆者による。
- 3) 勝又基「近世孝子説話の基底—『備陽善人記』をめぐる—」（『国文学』第46巻7号、2001）、同「網吉の孝行奨励と諸作品の成立—駿河国五郎右衛門をめぐる—（一）」（『明星大学研究紀要【日本文化学部・言語文化学科】』第14号、2006）、同「孝子説話と表彰—駿河国五郎右衛門をめぐる—（二）」（明星大学文化学部編『理想と現実』日本文化学部共同研究論集 第9輯、2006）、同「松平忠房の孝子伝—漢文孝子伝の役割と展開—」（『近世文芸』第91号、2010）、及び勝又基・矢吹美貴「水戸藩孝子弥作の顕彰」（『北陸古典研究』第24号、2009）など。
- 4) 佐野大介「貞婦さん関連文献及び孝子貞婦顕彰運動について」（『懷徳堂センター報』、2007）36-37頁、及び同「孝子義兵衛関連文献と懷徳堂との間 附翻刻」（『懷徳堂センター報』、2005）149頁も参照。傍点は筆者による。
- 5) 三重県立図書館編『三重県立図書館 地域ミニ展示 1994-2004』（津市・三重県立図書館、2005）226頁を参照。
- 6) 万吉については、例えば、滋賀県甲賀郡教育会編『甲賀史志』下巻（甲賀郡・滋賀県甲賀郡教育会、1926）1418-1425頁や、白井喬二・高柳光寿編『日本逸話大辞典』第1巻（人物往来社、1967）329-331頁、山田木水『亀山地方郷土史』第3巻、三重県郷土資料叢書 第32集（名古屋・三重県郷土資料刊行会、1974）165-170頁、関町教育委員会編『鈴鹿関町史』上巻（鈴鹿郡・関町役場、1977）666-670頁など参照のこと。
- 7) 井上豊太郎『和歌山心学資料小叢』（井上豊太郎、1937）26頁。
- 8) 同上、25頁。
- 9) 概要は、本稿の【表I】で写本Mと呼ぶ、濱田義一郎編『大田南畝全集』第16巻（岩波書店、1988）所収の「勢州鈴鹿山麓孝子万吉伝」の翻刻による。本稿で、出典が特に記されていない万吉に関する情報はすべてこの翻刻によるものである。
- 10) 植村康済「勢州鈴鹿孝子万吉伝」黒川真道編『日本教育文庫』孝義編上（日本図書センター、1977）。本著所収の「勢州鈴鹿孝子万吉伝」は万延元年に再版されたものを底本とした翻刻であるが、筆写が確認したところ、随菴服部喜の序文以外、寛政元年版と同じものである。
- 11) 写本Kには、「伝」は所収されているが、「附録」は見当たらない。
- 12) 「孝子伝を見はべりて」という箇所には、写本A・D・F・G・I・Jでは森山孝盛の和歌のみがあり、写本A・Jでは森山孝盛の和歌に次いで、佐久間孝由と佐久間頼昭のものが書かれており、写本F・Iでは森山孝盛の和歌に次いで、鈴木重通のものがある。
- 13) 森山孝盛「森山孝盛日記」原田伴彦編『日本都市生活史料集成』第二巻 三都編Ⅱ（学習研究社、1977）126、131頁。
- 14) 所蔵者は、【A】玉川大学図書館、【B】山口大学図書館棲息堂文庫、【C】国立国会図書館、【D】早稲田大学図書館、【E】刈谷市中央図書館村上文庫、【F】国立公文書館内閣文庫、（第9冊）、【G】国立国会図書館、（第22巻）、【H】心学明誠舎【I】国立公文書館内閣文庫、（第

- 98 冊)、【J】今治市河野美術館、【K】国立公文書館内閣文庫、(第 98 冊)【L】豊太郎『和歌山心学資料小叢』(井上豊太郎、1937)所収の翻刻、【M】濱田義一郎編『大田南畝全集』第 16 卷(岩波書店、1988)所収の翻刻。
- 15) 写本 E に従って、句読点は筆者による。
- 16) それぞれの加筆が、いつ、誰に加えられたのかは不明である。写本の詳細な書誌学的な検討によって、写本の流通過程を再現できるとも考えるが、今回は紙面の都合でこの課題を追求しない。
- 17) 西山拙斎「拙斎西山先生詩鈔」廣常人世編『西山拙斎全集』第 1 卷(鴨方町、2005) 183 頁。この記述は日付が記されていない頭注であるが、富士川英郎「菅茶山」『海燕』第 6 卷 4 号、225 頁(のち、富士川英郎『菅茶山』上巻(福武書店、1990) 312 頁)に、菅茶山が万吉を訪ねた日として寛政 6 年 4 月 22 日とある。
- 18) 西山拙斎「拙斎西山先生詩鈔」183 頁。
- 19) 大田南畝「一話一言」濱田義一郎編『大田南畝全集』第 12 卷(岩波書店、1986) 354 頁。
- 20) 表以外に、宣風・道也・観住・黙笑・拾瑞・三漢・正致・喜庵という人物と、とし女・冬女という二人の女性。宴会の情報とこの和歌の情報は、写本 C・H・M にしか記述されておらず、しかも必ず同時に記述されている点、和歌が宴会の描写の直後に記されている点から、成烈宅の宴会の場で詠まれたものと思われる。また、【表Ⅱ】にある、酒井在屋は天明 8 年 7 月 13 日で亡くなるので、少なくともそれ以前に詠まれたことがわかる。
- 21) 中井竹山『笈陰集』の「紀孝子万吉事」(水田紀久編『近世儒家文集集成』第 8 卷(ペリカン社、1978) 204 頁)。近藤元弘編「日本虞初新志」(王三慶・莊雅州ほか編『日本漢文小説叢刊』第 1 輯 1 冊(台北・台湾学生書局、2003) 207 頁)に翻刻がある。
- 22) 中井竹山「紀孝子万吉事」(前掲書、204 頁)。ただし、松平定信の家臣である駒井乗郎による写本 G は、「天明八戊申年の秋 老公御上京の時坂下駅にて右之孝子万吉 御目通て御呼出被賞よし」と、その対面を秋、しかも坂下駅でとしている。この対面について、松平定信は「上京紀行」の中に述べているはずであるが、残念ながら、上京の途次及び滞京中のことを記した乾巻は行方を失い、坤巻(一冊)のみが伝えられている(梅田義彦『伊勢神宮の史的研究』(雄山閣出版、1973) 240 頁)。
- 23) 阿部隆一「亀井南冥昭陽著作書誌」(『斯道文庫論集』第 16 輯、1979) 39 頁。
- 24) 福井久蔵「鈴屋大人に関する新資料」(福井久道編『古事記伝の研究』皇国文学 第 2 輯、聖文閣、1941) 169 頁。
- 25) 中野三敏「十八世紀江戸の文化」同編『文学と美術の成熟』日本の近世 第 12 卷(中央公論社、1993)を参照。一部変更を加えて、同著『十八世紀の江戸文芸一雅と俗の成熟』(岩波書店、1999)に「十八世紀の江戸文化」として所収されている。
- 26) 『二孝子記事』(国立公文書館内閣文庫所蔵)のは、「駿府伝馬町孝女満幾記事」と「孝子仁右衛門行状略記」からなるが、前者のみが、黒川真道編『日本教育文庫』孝義編下(日本図書センター、1977)に翻刻されている。
- 27) 黒川真道編『日本教育文庫』孝義編上所収。
- 28) 羽太正養「孝子糸太郎略記」黒川真道編『日本教育文庫』孝義編上、301 頁。
- 29) 多仁照廣「勘定奉行石川忠房年譜(上)」(『敦賀論叢』敦賀短期大学紀要、第 2 号、1987)、同「勘定奉行石川忠房年譜(中)」(『敦賀論叢』敦賀短期大学紀要、第 3 号、1988)、同「勘定奉行石川忠房年譜(下)」(『敦賀論叢』敦賀短期大学紀要、第 4 号、1989)、同「石川忠房と寛政期北方外交と蝦夷地経営―津軽・下北公領化視察「日本地境之杭」について」(『敦賀論叢』敦賀短期大学紀要、第 5 号、1990)、同「勘定奉行石川忠房の生祠について」(『敦賀論叢』敦賀短期大学紀要、第 12 号、1997)、同「石川忠房と江戸幕府教化政策」(『敦賀論叢』敦賀短期大学紀要、第 14 号、1999)の一連の伝記研究を参照。
- 30) 注釈 26 号に参照。
- 31) 森山孝盛「森山孝盛日記」131 頁。
- 32) 池上英子『美と礼節の絆―日本における交際文化の政治的起源』(N T T、2005) 7 頁。傍点は筆者による。

- 33)「孝子伝」と「仁政」との関係については、すでにいささか管見を述べたことがある。拙稿『『官刻孝義録』—幕府仁政のパフォーマンス』国文学研究資料館編『世界文学の中の日本文学—物語の過去と未来』第32回国際日本文学研究集会会議録（国文学研究資料館、2009）を参照。

（教育学講座 博士後期課程2回生）
（受稿2010年9月6日、受理2010年12月9日）

The Celebration of ‘Filial Children’ in the Edo Period: The Case of Mankichi

VAN STEENPAAL Niels

It is a well-known fact that from the end of the seventeenth century onwards *bakuhau* authorities, motivated by the intensely political and hierarchal narratives of ‘moral education’ and ‘benevolent government’, started to grant monetary rewards to commoners who displayed exceptional filial piety. Much less familiar, however, is the fact that there were also many private initiatives concerned with bestowing rewards and praise upon filial sons and daughters. Moreover, examination of these private activities seems to suggest that their motives were of intellectual, social, and cultural nature and that they took place within a network of like-minded men. In this paper I will introduce and examine the case of Mankichi, a filial boy from the Ise province. Using a variety of sources, I will reconstruct the events that led up to Mankichi’s official *bakufu* reward in 1787, and will detail the activities of a private network of *hatamoto* surrounding Mankichi before as well as after this reward. It will become clear that the private celebration of filial children must be understood in a hitherto ignored context in which filial piety was appreciated as an aesthetic quality.